

ない様に心掛けるつもりだ。最後にハンドボール部はチームプレーであるから、部員一人一人の好きかかってな行動言動を育てては勝利は有り得ないということを言って、この文の語句としていた。

反感



西本 由治

私は高校時代に何か一つのクラブ活動に打ち込もうと決心した。元来、私は腕を強くしたかったが、手でボールを扱うハンドボールに決めた。そんなささやかな目的でハンドボールをすることにした。が、今から考えるとそれは、全くかけ離れた夢であった。

そう、一年の夏の合宿の時、私はあんまり二年生にこき使われるので、合宿後の練習は一度も行かなかった。食事の用意、後かたづけ、ボールの手入れ、室のそうじ、その他色々の用をさされた。私は家においても、どこにおいても、一度だって人に使われた事がなかった。だからよけいに腹が立ってしかたがなかった。合宿だから一年も二年もお互いに苦しい。二年は一年生の時一度経験したから、二年生が何でもしてくれてもよさそうなものだ。毎日く、し

んどのいからみんな動くことがおっくうがちなのに、二年生は帰ながら一年生にあせいで、こうせいといつていいつけるばかりで、自分たちは少しも動こうとしなない。だから一年生はよってたかって文句ばかりいたいた。いつもそんな事になると、私が一番先に感情を爆発させて、二年生にたてついた者だった。そんな文句があるのならば自分でしろと。

いつだったか、こんな事も考えた。一年生だけで高津ハンドボール第二軍を作ろうと。ギーパー、バツク、ホワードも一年生だけでできるのだ。そして今の二年生の奴らどんな顔しよるやろ。そうか、二年生の奴らおいだしてしまおう。(まだそれは晩秋の時であつたが)一年生だけでクラブをやつてゆこう。こんなバカな事も腹いせに考えたものだった。しかし、二年生になって考えてみると、それらが二年生にとって一番苦痛な事があることがわかった。又、クラブ内の封建制はあたり前だと、そうでないとは統せいとれないし、今のサラリーマン社会の現実もそうであることだし、皆が平等であるとはボールの手入れとか部屋のそうじなどだれもしない。だから一年生は、昔の剣の修業のように、かまたぎ、マキ割り、口ウカふきをするが如きに、クラ

